心の中にはいつもいる

ヘイソナイソー

冬の朝は寒くて、雪も降っている。この小さな町はとても静かで時々遠くから鳥の鳴き声が聞こえる。こんな瞬間は僕の記憶の中の底にあるそのことを思い出させている。その忘れられないことが僕を幸せにした、僕の人生を変えた人がいたのである。その時を思い返せば思い返すほど楽しくも悲しくもなるのです。

それは七年前のことであり、僕はずっと住んでいた首都を母の仕事のせいでそこからものすごく遠い田舎のほうへ引っ越した。僕には父がいなく、母だけが家事も仕事もやっていたのである。母は貿易をやっていたのでいつも出張していて僕は母のいない日々がとても寂しかった。特にそこに引っ越した時にはとても寂しかった。田舎は町と違って周りは田畑であって一戸一戸の家もものすごくはなれていて昼間でもなかなか人の姿が見えない。

そして、僕はそこの学校に転校生として入学することになった。忘れられないその日、初めて新しい学校に通った日にその人に会ったのである。そこの学校の先生に授業を受けるクラスへ連れて行って貰ってそこのクラスで自己紹介した。でも、その時、僕の頭にクモが落ちてきた。僕はすごく吃驚し、"あー"と叫んだ。皆んなも面食らって一秒ぐらいしんとして静かにしたけれども誰かが"キャ"と笑い始めると皆んな大声で笑った。僕はとても恥ずかしくて心の中では何回も何回も"しまった。このクモのせいだ"と言っていたのだ。さらに、僕は前から恥ずかしがりですから僕の顔は大きなバラの花のように赤くなっていたのだ。その後、空いている席に座ってすぐそばの学生は"おまえ、バラの友達なの？顔が赤すぎ。そんなに恥ずかしいの。そんなに大きな問題ではないから大丈夫だ。"と言ってくれた。僕はその人の話を聞いて恥ずかしい気持がすぐになくなり、楽にするこ

とが出来たのだった。内向的でなかなか友達が出来ない僕のような人でも一時間半ぐらいでその人と友達になれたのだ。その人の名前は“ろク”だった。どんな時にも強くて、破壊することができないという意味だった。でも、心は誰よりもやさしい人だったのだ。ある日、僕とろクは食堂で昼食している時にある学生二人は話に夢中で前をよく注意せずに歩いて来たせいでいすとぶつかって持って来たコーヒーを僕達にかけてしまったのだ。コーヒーだからこそ熱いし、服が汚れてしまったのだ。その二人は“ごめんなさい。ごめんなさい。”と言って謝っていたけれども、僕はこんなことは謝っても許すべきではないと思ってしまい何悪口でも言おうとしたら、ろクは先に“大丈夫だよ。大丈夫だよ。”と言って終わりにしたのだ。その後、ろクは“小さな許せることから許してあげてよ”と言ったのだ。僕はその時自分がとても恥ずかしく思った。それからも、ろクは僕の唯一の友達

だったのだ。ろクは学校でスポーツも上手だし、数学とか英語とかもよく出来るすばらしい学生だった。そのうえ、先生達のお手伝いもやるので学生から先生にいたるまで大人気者であった。僕もろクに勉強に手伝ってもらったり、週末には一緒に出かけて遊んだりしていた。不思議なことに、僕とろクの趣味は同じだった。それは釣りだ。ひまのある日にはいつも学校の隣にある大きな池へ行って釣りをやった。何でも上手なろクは釣りもする時も僕より魚をたくさん釣れたのである。だから、僕は“あい、お前本当は人間じゃないでしょう”と言ってからかった。そう時ろクは“釣りは俺が得意だからだ。君が俺より上手なこともちろんあるよ。人間一人一人は違う。得意いなことも苦手なことも違うからある人ができることが自分ができなくてがっかりする必要はない”と答えた。僕はいままでそんな考え方を一度もしたことがなかった。実際に真面目なことをやったこともなかった。

普通にいつも学校へ行きたくなくて遊べる週末を待っていたただの高校生だったのだ。その時から僕はろクにあこがれるようになったといってもいいすぎではない。それから、時間がたって欲しがった夏休が来た。僕はろクと一緒に勉強でもしようかと思ったけれどもろクは家族と旅行することになっていたのだった。ろクが旅行に行ってから、一週間ぐらいに大きな台風は大災害をもたらした。それのせいで多くの人々も国中で亡くなってしまい、ろクもその中の一人だった。僕はそれを聞いて驚いたのなんのって。唯一の友達が急にそばにいなくなって、心は壊れました。

僕の友達、ろク、今どこにいるんだろう。天国でも楽しんでいるだろうか。釣りでもしているだろうか。まー、それは僕が知らないことだ。でも、ろクは僕の記憶の中にも心の中にも忘れられない人として死ぬまで生きている友達だ。